ふるさとのいろあそび

「見方」を変えれば、「見え方」が変わる。「見え方」が変われば、「日常」や「当たり前」の中に隠れている「宝物」が見えてくる。そのような思いから、子どもたちと一緒に、「色」という視点で、身の回りの「日常」や「当たり前」を捉え直してみたいと考えました。

「地域の色・自分の色」研究会

実　践　別府大学明星幼稚園

監　修　秋田喜代美

はじめに

私たちの「まわり」には、いろいろな「色」があります。
「地獄めぐり」に行けば、いろいろな「色」の「地獄」があります。
「海」に行けば、いろいろな「色」の「石」や「砂」があります。
「山」に行けば、いろいろな「色」の「石」や「草花」があります。
「お家」や「園」のまわりの「石」や「土」、そして「草」や「木」の中には、いろいろな「色」が、かくれているかもしれません。
その中には、ずっともちつづけていたいと思う「きれいなもの」もあると思います。
それを、この「あそび」の中で、さがしてみます。

子どもの「やりたいこと」から広がる環境構成

① 色の絵本コーナー

絵本「ふるさとのたからもの」との出会い

「これ・・と・・これ・・、おなじ色！」
「地獄の色きれーい！」
「あかーい！」「あおーい！」

② 色みつけ（室内から園庭へ）

色水作りや絵の具つくり（技法）との出会い

「お部屋にも色がある！窓の外にも色がある！」
「花や実にも色がある！」→（色水づくり）
「土にも色がある！」→（絵の具作り）

③ 色あそび（園庭から地域へ）

「血の池地獄の泥」との出会い

「地獄の泥でも絵が描けるかなあ？」
「地獄の色で布は染まるかなあ？」
「もっと、やってみたーい！」

④ 色工場

「材料と場所・道具」との出会い

「みんなにみせたーい」
「小学生のお兄さんにみてもらおう！」
「お家の人にプレゼントしたーい！」

⑤ 色博物館

お家の人、地域の人との出会い

「血の池の泥で染めたよ！」
「みて、みて！きれいでしょ」
「おかあさん！血の池地獄に行きたい！」

ピックアップ／ドキュメンテーション1

花や実にも色がある？夏

強くこすると色が出てくる。

たくさんの色水を作りたい。
「みんなでつぶそう！」

「色の階段だねー」
「青色が、薄い色から並んでる」
「ぼくの赤は、消防車色」
「何か、歌いたくなるねー♪」

絵の具で色水遊びを経験した年中組。年長組になった夏、幼稚園や園の周りにある草花や木の実を探して色水遊びをした。美しさを感じ、発色する様子や色の違いを体験できるように、保育者は、すり鉢やすりこ木、ビニール袋など、必要な道具を用意した。

子どもたちは、すりこ木とすり鉢を使って花や実を潰す。「青！青が出てきた」「山桃は赤い」と色を出すことに熱中する。園庭のフェンスに、色水を入れたビニール袋を吊るすと、似た色を並べ替えてみたり、濃淡に着目して階段状に並べてみたりする。並べた色水にリズムを感じたのか、色水の袋を１つずつ触りながら「ドレミファソラシド」と口ずさむ子もいた。

花や実にも色がある？冬

12月になり「冬は、色水ができないのかな？夏のようにしたいな」とＲくんがつぶやく。その思いに応えたいと保育者が植物を探すと園庭にパンジー、通園路にヤブランが見つかった。

Ｋくんが、ヤブランを、すりこ木ですり潰す。紫色の汁が出た。「うぁっ、黒い紫」と濃い色に驚く。

Ｎちゃんは、ペットボトルに、パンジーの花を入れ、振って色水作り。「こっちは青、透き通った青だよ」と色に名前をつける。「お花を潰すとかわいそうだからペットボトルの中に、お花と水を入れて、振って色を出すよ」とＮちゃんの色水づくりの楽しみ方が見られた。

ピックアップ／ドキュメンテーション2

土にも色がある？

「黒い色にしよう。畑の土は黒いはず」
グループで畑の土を集める
ザルとすりこぎで土をふるう

「少しザラザラしてる。
すな（砂）色の絵、見て！」

「やっぱり、黒いよねー」
「線をいっぱいかいた」

「泥絵の具が手についちゃった」
感触を楽しみながら絵をかく

「幼稚園の土も色がありそう。」「畑の土は黒いよ。」園庭の土の色に着目する子どもたち。「土で絵の具を作ってみる？」の保育者の言葉に、子どもたちは、園庭に散らばる。「畑に行けばやわらかくて黒い土」（芋ほりの後なのでみんなが知っている）「砂場の近くは、サラサラで薄い色」「溝の中の土は団子にならない」など土のことをよく知っている。

Ｓくんのグループは、「畑の土は黒いはず、黒い土を作ろう」と畑の土を集めてくる。大きなザルに入れた畑の土をすりこぎでダイナミックに潰したりふるったりする。バケツに落ちた土に手を入れたＳくん「キャー、ふっかふか、柔らか、みんな見て、見て！」と誘うと、みんなも手を入れて確かめる。ザルでふるい、空気も混ざった土は本当にしっとりと柔らか。新しい感覚の土との出会いである。

ペットボトルで作ったろ過装置で泥をろ過し、泥と糊をまぜた土絵の具で思い思いに絵を描く。「できた。やっぱり黒い」。Ｓくんは、絵筆に泥絵の具を付けては線を描く。真っ直ぐな線、カーブさせる、前の線に重ねて描く。「黒い泥がつながるところがおもしろいんや！」画面いっぱいに線描きを楽しんだＳくん、余白に『つづく』と記す。まだ泥絵の具遊びが足りないとみえる。

「これは、黒くないなぁ。
柔らかい灰色」

降園後、Sくんは園庭で絵の具作りに熱中する。丸いお皿を上下、左右にふるって土の細かな粒子を集め「柔らかくて気持ちいい」とその感触を表現する。畑の黒い絵の具と比較したのか、「柔らかい灰色」と命名する。

容器を傾けながら土や砂を動かすことで大きな物が振り落とされ、選別された微細な粒子が底に残ることを経験から学んでいる。子どもたちは、残った土の柔らかな感触が大好き。保育者は次の絵の具の遊びに向けて容器を用意する。

ピックアップ／ドキュメンテーション3

地獄の泥で絵が描ける？

「血の池地獄に坊主地獄ができました」

「血の池地獄にティラノサウルスが
やってきたぞー」

地獄めぐりに行く予定が、新型コロナの感染拡大で中止になる。そこで、保育者は「血の池地獄」「天然坊主地獄」の泥をいただき、子どもたちに見せる。

「わぁードロドロ絵の具みたい」「溶けたチョコレートみたい」光沢があり絵の具に似ている血の池地獄の泥、灰色の天然坊主地獄の泥に興味津々。「絵の具みたい？絵を描いてみる？」保育者の呼びかけに「やる、やる！」「描けるの？」。こちらも興味津々。保育者が小さなカップに泥を分け、糊も入れて混ぜる。子どもたちはじっと見つめる。今度は、自分たちが、絵筆に泥絵の具をいっぱい付けて用紙におろす。「わぁーかけるわー」「いっぱい付くー」「本当に付くわ」。マーカーや絵の具のような人工物以外の着色材料に出会う子どもたち、「泥とおんなじ色」「茶色オレンジと灰色」と気付きが言葉になって生まれる。二つの泥を使い分けたり、湧き出す泥を丸く描いたりして「血の池地獄に坊主地獄ができました」とその形態を捉える子どもたち。

ピックアップ／ドキュメンテーション4

『血の池地獄』の泥で、染まるの？

先生が染めてみたんだけど

血の池地獄の泥で？

「わぁー、オレンジ色のチョコレート」
「わぁー、ドロドロ、ぬる ぬる」
「さわってみようか」
「さわったらだめだよ。熱いんじゃない」

「ここは、ビー玉、下は割り箸。
どうなるかな？　楽しーみ♪」

「ゴムを4本も巻いたよ、どうなると思う？」
「私も」

「わあードキドキ」
「チョコレートのおふろに入りまーす。どんな模様？何色？」

血の池地獄の泥をビンに入れて子どもたちに見せる。子どもたちは、泥の入った瓶に「何か始まる」予感を感じている様子。「先生が自分で染めたんだよ。」保育者が染めた布を見せると驚きの声が上がった。「えっ本当？」「どうやったらそんな模様になる？」「ひまわりみたいやなー」「どうやるん？」

「うーん、むかーしね、血の池地獄で染め物をしてたんだよ。地獄の泥は染める力もあるんだって。『薬も入ってるから、身につけると体が守られる』って聞いたよ」と保育者。

布に割り箸を入れてゴムで巻く、キャップの蓋、ビー玉も巻いて見せる。子どもたちは「ひまわりの模様をいっぱいつけたいからゴムは4本」「ビー玉と割箸」「キャップ3個」とそれぞれに出来上がりを予想しながら材料を選んで巻いていく。巻き終えたらいよいよ泥の中へ。チョコレートのお風呂に見立て、血の池地獄の泥におそるおそるつけた。

3時間後、布を洗って広げてみると、

「泥と同じ色だぁ」

「カッコいい！観覧車」

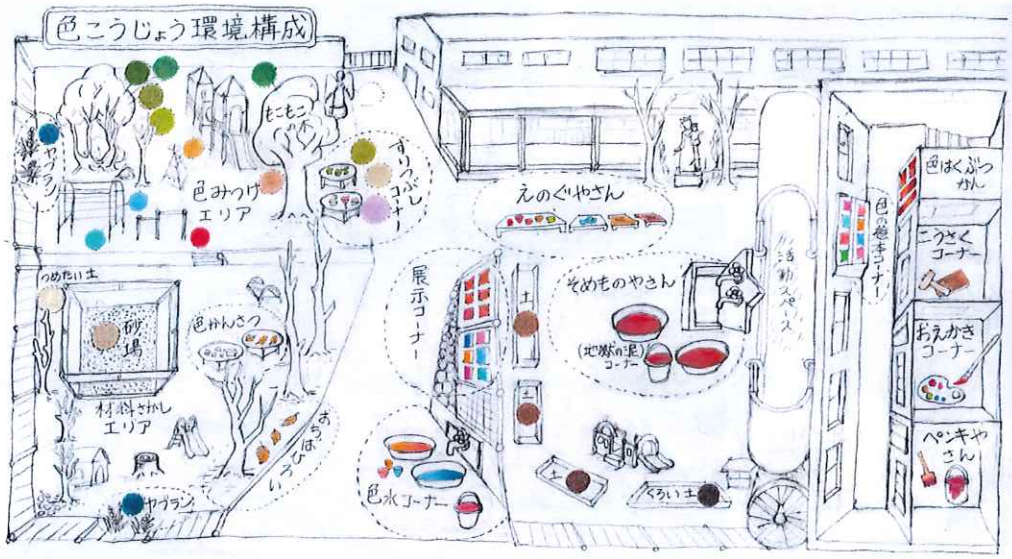
「小さい花と大きい花が咲いた」

「シャボン玉が飛んだ♪」

３時間を経て泥から布を取り出す。ぬるぬる、しっとりした地獄の泥の感触を楽しみながら、タライの水で布を洗う。広げてみると、様々な模様が出てくる。嬉しそうに「観覧車」「ひまわり」「朝顔」と見立てる、「シャボン玉が飛んだ」「大きい花、小さい花」と景色を形容する。Ｙちゃんは「泥と同じ色、茶色だ」と染める前後の色に着目。１回目の染物は、「地域の物を使うと体を守ってくれる」と聞き、台紙に貼って飾り、絵や言葉を書き、お家の人にプレゼントした。

みょうじょうようちえん『色工場』

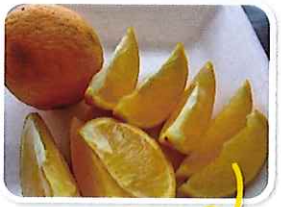
Ｓくんの「もっとべつの物にもぬってみたい。木とかにもぬってみたい」、Ｒくんの「もっと大きい布に染めてみたい」などの願いをかなえたいと思い、草花や草の実の汁にカボス酢を加えて色を変える、大きな布や木片など新しい材料も用意して、地獄の泥をぬるなど、やってみたくなるような遊び『色工場』を構成した。



色の実験コーナー

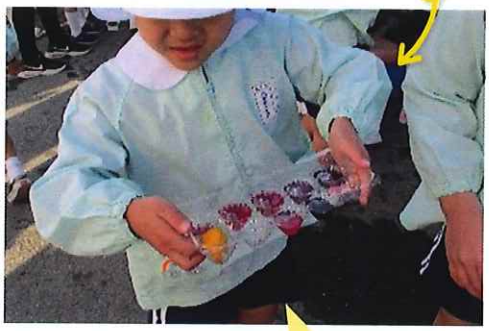
この時期、大分は、特産のカボスが食卓を彩る。どこの家庭にも見られる食材のカボス。色水の色の変化を楽しめる材料と考え、花や実と一緒に置くことにした。

色水にカボス酢を入れたら？



カボス酢を入れると、

卵パックのくぼみにヤブランの色水を作る

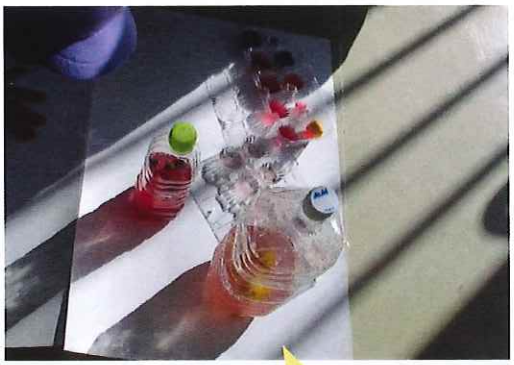


わぁー、色が変わった。ピンク色になったよ

「みんな見て、見て」

カボスを入れたKちゃんの色水に友達が集まる。
「濃いピンクと薄いピンクはなぜ？」
「どうしてピンクになったの？」話が弾む。
少しだけカボスを入れた友達も横に並べて、
「僕は、少しずつカボスを入れたから同じ色
保育者　「どの色が好き？」みんな一斉に指さす。

太陽の光が当たると、



「色水にお日様の光があたってる」
「下の紙に色水が写ってるよ」
「色水の色が写ってる、青、ピンク、濃いピンク、薄いピンク」
「ペットボトルの色も写ってる」

プリンカップの色水では

「色水がゼリーみたいになっちゃった。青色が紫とピンクにわかれた、すごい！」

「みかんは、カボスのなかま」

T児「みかんはどう？」
「みかんの汁もやっぱりピンク色」

「冷蔵庫で凍らせてみる？」

「ピンク色のまま凍ってる」

色水遊びに、いろいろな容器を準備。Kくんは、たまごパックを選び、10 個のくぼみにヤブランを潰した色水を入れた。「黒い紫」と色を表現する。カボスの汁を入れると「うわぁー、ピンク色」と変化に驚くKくん。４個のくぼみまで試し、「見て、見て。」と保育者や友達に見せる。「これは、もとの色。これはカボスを入れた色」と説明するKくん。すると、友達が色の違いを発見した。「ピンク色が少しずつ違うね」

光の差す出窓に置いておく。「先生、下（出窓の板）に色がついてる」とＲくんが気付く。

出窓と同じように光が当たる所にパックを移動させ、白い画用紙を敷く。周りに集った子どもたちは、床に顔を近づけたり、離したりして色を探す。「あった、あった。色水と同じ色」と色水を映す画用紙の上の紫やピンクの色を喜んだ。自分が作った色水のペットボトルを画用紙に立て、同じように光を通して映る色を確かめる姿もあった。

翌日、「カボスって、みかんに似てるね。みかんでも色が変わるかな？」と話すＴくん。他の子どもたちに尋ねると、「変わる」と答えた子どもは半数。そこで、みかんの果汁を入れるとピンク色に変化した。子どもたちは「ピンクー」と歓声をあげた。「うーん、カボスやみかんは紫色をピンクにする力を持っているんだ」とＴくん。「そうだねー」子どもたち。カボスの「色を変化させる力」に感心。拍手がおきた。

色のそめものやさん

大きなぬのにそめたい

「どんなもようにする」
「ここにキャップを置こう」

「ビー玉をいっぱい巻いたよ。
楽しみ」

「洗ってみるね」

「広げてみるよ。
どんな模様が出てくるかな？
楽しみ」

友達が染めた模様に関心をもった子どもたち。「もっと大きい布（きれ）でやりたい」「違う模様にチャレンジしたい」と次の遊びを保育者に提案した。保育者は、広い布、長い布、より沢山のゴムやビー玉、割ばし等を用意する。

広くて長い布は、物を巻く準備に手間取ると考えたのであろう、「私、可愛いからたくさーんのビー玉巻きたい。Sちゃん、一緒にしない？」と３人で協力しようと呼びかける。見通しを持って取り組むチームもあった。Mちゃんの３人チームは、30個ほどのビー玉を巻き、小さな可愛い模様に染まり、「ビー子ちゃんたち」と布に命名した。前回、ペットボトルのキャップを巻いて染めたR児、「今度は割ばしを使って大きな模様を作りたい」と話していた。仕上がりに満足しているのか、共同で染めた友達と布を広げて満足そうな表情を見せる。

２回目の大きい染物を見て、子どもたちは「わぁー大きい輪！小学校のお兄さん、お姉さんそれに中学生や高校生にも見せてあげたい」と声があがった。

キャンパス内に展示して小中高校生にも紹介することにした。（表紙の写真）

色のペンキやさん

泥でぬってみたら

地獄の泥に膠を混ぜて絵の具にする

「泥で描くこと」や「染めること」を体験した子どもたち。「こんどは、ペンキのように泥を塗ってみたい」という。古い本には、「血の池地獄の泥は、家の柱に塗られた」書かれているそうだ。そこで、保育者は、大小のかまぼこ板を用意、血の池地獄の泥に膠を混ぜて絵の具にした。

「見て！多めにつけると黒っぽくなったよ」

「やっぱりチョコレートみたい。おいしそう」

「いろいろぬっちゃえ、地獄の泥♪」
「手にもぬっちゃった♪ザラザラしてる」

飾りをつけたいね

「泥の色に何か飾りたいね」
「先生が飾りを用意してるよ」
「わぁーい」
「目もあるよ、星もあるよ」
「ほっぺたをピンクの星にしよう」
「星のくつを履いたよ」

名前も付けようよ

「かわいいね。名前をつけようよ」
「泥は、守ってくれるんだよね」
「オメダイみたい？」
「守り神？」「どろのお守り？」
「『みんなのどろお守り』は？」
「もう1年生になるから『思い出お守り』？」
「じゃあ、『みんなの思い出のどろ守り』？」

どこに飾る？

「ねえねえ、みんなどこに飾る？」
と保育者
「家のピアノの上に飾る」
「いつも持っていたい、お散歩の時も」
「いつも持っていたい、守ってくれるから」
「ぼくのために持って帰るけど、お父さんお母さんと赤ちゃんも守ってもらう」

みんなのおもいでどろおまもり
【Hちゃん制作】

子どもたちが「みんなの思い出の泥守り」を見せ合っている横で、Hちゃんは３枚の紙を手にしていた。保育者が見ていると３枚をテープでつなぎ、現れたのがこのキャプション。文字が自分の気持ちを伝えるツールであることを経験してきたHちゃん、「みんなで作ったよ。さくら組のみんなの思い出だよ。赤い泥のお守りだよ、見て！」Hちゃんはみんなで共有したこの時間の満足感を伝えたかったのではないだろうか。周囲にはカラフルな色で好きな絵が描かれ、「楽しかった」「いいでしょう」そんな思いも察せられる。夢中になって泥遊びを楽しんだことが分かる。

血の池地獄の泥で塗ることを体験した子どもたち。「溶けたチョコレートに似ている」と気付きを言葉にする。手に塗ってザラザラの感触を楽しむ。「血のにおいがする？」とにおいを嗅いでみる。そして、「泥を塗って赤くなったかまぼこ板に何か飾りたい」と願いを口にする。保育者が、目玉や飾り、毛糸、紐などを準備すると、子どもたちは、飾りを星や花、体の部位に見立て飾り始める。

途中、「名前を付けたい」とアイディアが出てくる。大事な物には名前を付けたいようだ。

赤い色がお守りになることを知っていたのか、神社でお守りをもらったことがあるのか、かまぼこ板の形から連想したのか。「お守り」という言葉が飛び交っていた。明星幼稚園では、５歳児の七五三に「オメダイ」というお守りのバッジをいただく。これと関連付けているようだ。

血の池地獄の赤い泥、卒園前の思い出、みんなと作ったこと、それが総合されて「みんなのおもいでのどろおまもり」と名前を付けた。「お散歩の時もいつも持っていたい」（Yちゃん）と、子どもたちには大事な「思い出の泥お守り」となったようだ。

「ふるさとの色あそび」の広がり

▷ 3歳児へ

グルグルグル

つまむ・引っ張る

ドーナツができた！

保育者が、小麦粉粘土と地獄の泥を準備した。子どもたちは、粘土にグルグルと泥を塗って着色する。粘土と泥をこねる。こねた粘土を「おいしいドーナツ」と見立てるなど、その子なりの遊びを楽しんでいた。

小中高校生へ

キャンパスの森に染めた布を展示

「お兄さんやお姉さんに見てほしい」という子どもたち。願いを叶えたいと思う保育者。幼稚園の隣、キャンパスの森に布染めを展示、小中高校生に紹介。

それを見た、中学･高校書道部の顧問から、「血の池地獄の泥で書を書いてみたい」との申し出があった。書道部員も「泥で書けるか挑戦したい」と、関心を寄せているという。

後日、血の池地獄の泥に糊を加え、温泉水で薄めて泥汁を作り、書道が始まる。書く姿を見た園児は、「かっこいい」「かいてみたい」と憧れの眼差しを向け、筆運びを真剣に見ていた。

泥で書を試す

トラ年に因んで「寅」

アルファベットでＴｒｙ

天をつく「虎」

書道部の生徒たちが、次のような感想を寄せた。

・墨よりもドロドロしている。墨よりもかすれが出やすく書に味が出た。泥の色は人工色と異なり自然な色で温かみを感じる。別府の観光資源の地獄を芸術にも取り入れられると知り親近感がわく。（高校　２年）

・泥は落ち着いた色で、とても好きな色。見るだけでなく、実際に使って楽しく書けた。これから生活していく中で、自分の住む地域の自然の色などを探していきたい。（高校　３年）

・味のあるかすれが出るところが墨と似ている。泥の色は絵の具と違って深みがある。地獄の泥でいろいろなことができることを知り、久し振りに地獄巡りに行きたいと思った。（中学　２年）

大人たち

「先生にも教えて」

「いっぱい巻いた方が楽しいよ」

「ビー玉を入れてゴムで巻くんだよ」

「できた！うれしい！教えてくれてありがとう。楽しいよね」

子どもたちの染物を見ていた学童保育のＴ先生、「わぁー楽しそう！Ｅちゃん、教えてよ」地獄の泥染に興味をもって、声をかけてくれた。手仕事が大好きな先生。子どもたちが、材料やゴムの縛り方を自慢気に説明する。この日は、一晩つけて置くことにした。翌日に泥から取り出した。そして、染め物が出来上がった。

「別府市誌にも載ってなかったですよね、地獄染め。初めての経験です。今度は、ちりめんで染めたいわ」と、血の池地獄の染物を初めて経験し、学童保育Ｔ先生の興味は尽きない様子。

保護者エピソード

お家の方々は？

◉Ｅちゃんの母　「地獄の泥で染める方法は３つあるよ。割箸、キャップ、ビー玉」と幼稚園の遊びを詳しく話してくれました。当初、「地獄？」「泥」「何のこと？」と思っていましたが、染物のプレゼントで泥や染物のことが分かりました。娘は誇らし気に渡してくれ「楽しかったんだな」と実感しました。娘の染物は私の「宝物」です。今も我家に飾っています。別府にしかない「地獄の泥」を使った遊び、とても斬新だと思いました。

◉Ｍちゃんの母　血の池地獄に行きました。地獄は高温、入れないように柵があり、柵の向こう側にある泥を使って絵を描いたり、染めたりすることは、通常できないことです。貴重な体験はずっと心に残ると思います。別府の材料を使って、子どもたちの楽しい体験になったことを嬉しく思っています。

◉Ｋちゃんの母　「地獄」「泥」「オレンジ色」について毎日話してくれます。迎えに行くと、干している染めた布の説明をしてくれました。家族全員が地獄に興味を持ち始めました。「コロナが収まったら、みんなで絶対地獄巡りに行こう」と話しています。

地域へ

こども「色」博物館

「地域の色・自分の色」研究会が血の池地獄に『こども「色」博物館』を設置。その中に、遊びの様子を写した写真や血の池地獄の赤い泥で染めた布、赤い泥で書いた書を展示。合わせて、この取り組みについての感想をポストイットに書いてもらうよう見学者に依頼した。

1月末から展示して約1か月、100 枚を超す感想（ポストイット）が寄せられた。「よい取り組みですね。こんなことができるあなたたちが羨ましい！大阪の先生より」「きれいにそめたね。おうちにかざりたいな。」「まっかっかで泥と思えない！」「凄い、力強い書と可愛らしい染物、すばらしい」

研究会からの話

この「色」遊びの中で、子どもたちは、家や幼稚園のまわりの石や土、そして草や木の中に、いろいろな「色」を見つけました。その中には、ずっと持ち続けていたいと思う「ふるさとのたからもの」もあったのではないかと思います。そして子どもたちは、「色」を通して身近な自然や歴史や文化と直に触れることで、関心が広がり、深まり、不思議を「知りたい」「伝えたい」という思いに向かって行きました。その思いを、ずっと大事にしていけば、いずれその思いが学ぶ意欲につながっていくのだと私たちは信じています。

照山龍治（「地域の色・自分の色」研究会　代表）

大学の先生からの話

地域の植物や土・泥などの自然の色に出会い、かかわり、子どもたちはいろいろなワクワクと気づきを経験しています。色の変化、色で書く・描く、染めるなどに夢中になる遊びの中での学びが深まっていきます。色について試してみることを通して、地域の色の「きれいさ」「美しさ」を感じています。色の美しさ、カボスの香り、土泥のぬるぬるな手触りなど、感性を通した教育は、幼児期ならではの体験です。ワクワクの輪は保護者や小中高校生、年少者、学童クラブの先生や地域の人たちへと広がっています。足元から始まる SDDｓの姿です。心に深く刻み込まれる喜びは子どもたちにとって生涯忘れられない宝物となるでしょう。

秋田喜代美（学習院大学教授・東京大学名誉教授）

おわりに

みなさん、「きれいなもの」を、みつけることができましたか？

私たちの「まわり」には、まだまだ、「きれいなもの」が、いっぱいあります。その「きれいなもの」をみつけて、ずっと大事にしていけば、それが、いつか「自分だけ」の大事な「たからもの」になると思います。

みなさん、これからも、身のまわりから、ずっと、大切にしたいと思う「自分だけ」の「たからもの」をさがしつづけてください。そして、大人になっても、みなさんが「生まれたところ」や「今、住んでいるところ」をすきでいつづけてください。私たちはそのように願っています。

本冊子は、教材「ふるさとのたからもの（右の写真）」をきっかけとして、色みつけから、色あそび、おどろきとの出会い、やってみたい・やってみたよ、みんなに見せたいに向かう幼稚園での実践例を紹介したものです。

主に幼稚園、こども園、保育所等の保育者向けに作成しました。

小学生が「ふるさとの色」で「学ぶ」前段階として、幼児期には「ふるさとの色」で「遊ぶ」体験がとても大切だと考えています。子どもは、遊びの中で体験を通して学びます。夢中になって地域の「色」と遊ぶ中で、「地域の色」が、子どもたちのふるさとの原風景となる、そのきっかけとなれば幸いです。

なお、「ふるさとのたからもの」は　https://museum.o-iro.jp/（右 QR コード）からダウンロードできます。

「色あそび」の中で、子どもたちが出会った「おどろき」や、「やってみたい・やってみたよ」、「みんなに見せたい」という子どもたちの「思い」や「実践」を、「色」という視点から科学的に体系化して、探究教材「ふるさとのふしぎ」を作成しました。

子どもたちは、身のまわりの自然や歴史文化に関心を向け、不思議を解き明かしていく教材として、また、地域の人たちは、地域資源を保護し、活用していく手引書として、入門教材「ふるさとのたからもの」と探究教材「ふるさとのふしぎ」を一体的に活用していただければと私たち研究会は願っています。

「地域の色・自分の色」研究会		代　表	照山　龍治
		副代表	木村　典之
		会　員	幸野　洋子
			山﨑　朱実
			塩月　孝子（事務局）
監　修	学習院大学、東京大学名誉教授	教　授	秋田　喜代美
協力者	学校法人　別府大学　明星幼稚園	園　長	佐藤　元昭
		主　任	大井　万由子
			越智　亜也
			安部　志歩
			長野　茉優
	明豊中学校・高等学校書道部顧問		岡　昭光
実践園	学校法人　別府大学　明星幼稚園		
挿　絵	後藤　友実子　　題　字　大塚　伊都子		
印刷製本	株式会社　明文堂印刷		
発行日	2022 年 3 月 31 日		

※本冊子は、科学研究費基盤（B）課題番号 20H01676　代表 藤森裕治　分担者 秋田喜代美（学習院大学）経費により作成されたものである。

「地域の色・自分の色」研究会